2003 年のロータリー100 周年を記念して平塚西 RC が建設したヒマラヤン・アカデミーに、2024 年 5 月 10 日～15 日まで小網会長・近藤(直)エレクト・石井副幹事・関口・齋藤・成田の 6 名で行って参りました。
ネパールの識字率向上を願い建設した学校も卒業生の何人かは大学に進学しており、そのうちの 1 名であるガジェル・シドハーサ君に会うと共に、カトマンドゥの案内・通訳を引き受けていただきました。

ヌワコット郡パタールの町も当時の人口 2,000 人から現在は約 30,000 人に増え、中心商店街にはレストラン、銀行、ホテルまで出来ている立派な町に発展していました。
当時行くのにカトマンドゥから 4 時間余りかかっていた道のりも中国の援助で道が良くなり、2 時間 30 分ほどで行けるようになりました。カトマンドゥの町も外国人観光客、とりわけインドからの人が多く、以前に大勢いたストリートチルドレンも見かけなくなり、インドと共に経済発展している様子が伺えました。

記念式典では約 300 人の生徒、親族、先生や職員の方に歓迎戴き、『平塚西ロータリーの会員が世界的ネットワークを通じて国際理解・親善・平和を推進する』ことを成田会員が話し、関口会員が尺八で『さくらさくら』を演奏しました。
バナーの授与も行い、会場で大盛り上がりした生徒たちの笑顔が忘れられません。次々年度に平塚西 RC も 50 周年を迎えますが、記念事業の一端に繋がればと思います！

プロジェクトＸ『ドキュメント･Himalayan-Academy』

目　次

1. 記念事業
2. 湧き上がる不安
3. 動き出した思い
4. 伝わる熱意
5. 建設予定地
6. 活動再開
7. 仮校舎での授業
8. 再訪問
9. 定礎式
10. 建設確認
11. 現地視察
12. 開校まで
13. 寄せる想い

プロジェクトＸ『ドキュメント･Himalayan-Academy』

1. 記念事業

始まりは 1999 年。

20 世紀も残すところ 1 年余りとなったこの年の秋、10 月。

積み立ててきた基金を有効に使う手段として、文盲率の高い地域に学校建設をしてはどうだろうかというアイディアが山田会員より提案される。それは全会で受け入れられた。

「場所はどこがいいだろう」

その対象地域の絞り込みが始まった。折しもロータリー奨学資金で日本に留学していた、プラタナング・ラジェシュ氏を山田会員は脳裏に思い浮かべた。

「ネパールはどうだろうか」

会員たちは漠然とネパールという国を思い浮かべたが、知識としてあるのは「エベレスト」そしてヒマラヤの山々。

具体的なことを何も知らないことに、改めて驚いた。

早速、各自がネパールについて調べてみた。

ヒマラヤ山脈の南側、北海道の 2 倍ほどの小さな国。人口は 2,000 万人ほどだが、そのほとんどが貨幣経済と縁の薄い生活をしている。標高は南部の海抜 60m から、エベレストの頂上 8,848m まで。首都はカトマンドゥ。

留学生のラジェシュ氏を招いて話を聞くと、産業の少ないネパールでは、英語が話せると外国企業や観光などの「いい職場」につける可能性があるが、子供たちの就学率は低く、そのために自国語であるネパール語ですら文字の読み書きが出来ない人も多いという。

「最適ではないか」という意見が出され、その計画は動き始めた。

「ありがとう、ありがとう」

ラジェシュ氏が興奮した面持ちで繰り返していた。

2. 湧き上がる不安

「生の情報が知りたい」

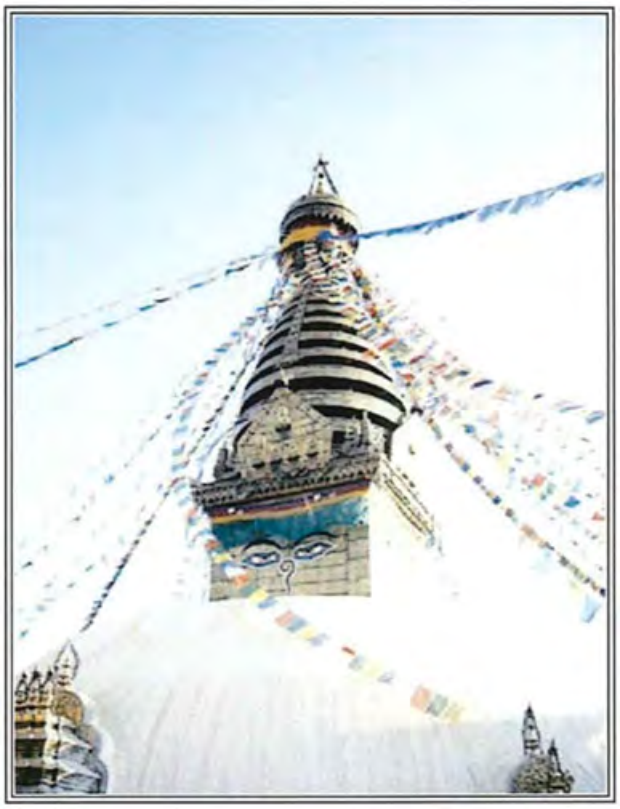
それは当然の意見だった。会員たちはネパールに関することや、行った人の話を集めて回った。持ち寄った情報をお互いに明かすと、それは会員たちの不安を掻き立てるものばかりだった。

「ある会社に聞いたのだが・・・・・・」

「これは実際に行った人の話だが・・・・・・」

ネパールは、公民ともに先進国からの援助に頼っている。日本からも毎年、多額の ODA が提供されている。その経済状況が「染み付いている」という話も聞いた。いわば「援助慣れ」というものである。

文字を読めない人が多いためか。外国人が何か事業を始めると、様々な団体、企業、フィクサーなどが中間に入ってくるという。彼等が搾取するために、肝心の支援相手に充分な金額、物資が届かないとも。



そのためであろうか。「お金を出したが完成しない。騙された」という話が多かった。

送金の手順や方法、誰と交渉すればいいのか、誰に任せればいいのか、わからないことばかりが多かった。

会員たちは口にこそしないが、事業計画の見直しを思い始めていた。積極的な関与を恐れるものもいた。

結局、年が明けた 2000 年は、何一つ着手できないままに過ぎていった。

ラジェシュ氏からは何度も連絡があり、

「その後、どうなりましたか」

短い言葉ではあったが、計画の停滞に苛立ちを感じているようだ。

・・・・・・誰もが、この計画を口にしない日々が続いた。

3. 動き出した思い

2001 年 4 月。桜の花が咲く頃、その年の伊藤延雄会長が切り出した。

「この目で見ようじゃないか」

会員たちは驚いた。忘れたわけではなかったが、触れないでいたテーマである。

「安全な国ではないらしい。何かあったらどうする」

「良くない噂しか聞かないのに、あえて行かなくても」

そんな意見に、伊藤会長は声を上げた。

「ここで考えていたって仕方がない。現地に行って、見て、確かめてこよう」

その言葉に大きく頷く者たちがいた。吉川、成田の両会員だった。早速準備に入る。成田会員は、直ちにラジェシュ氏と連絡を取った。

「ネパールを視察訪問したい、通訳をしてくれないか」

「喜んでお手伝いします。祖国の子供たちのためですから」
訪問は 5 月 30 日。調査団メンバーは、伊藤延雄会長、吉川会員、成田会員の三名。
　停まっていた思いが、動き始めた。

4. 伝わる熱意

　雨季の湿った風が吹き抜けるトリブヴァン国際空港に、三人は降り立った。まるで地方空港かと見紛うような小さな建物。2 階で入国審査を済ませ、1 階の税関を抜ける。辺りを見回すが、先に帰国したラジェシュ氏の姿はない。

　言葉も通じぬ国で、ガイドに会えないのは不安である。三人は「まさか・・・・・・」という思いが、腹の底から重く湧き上がる気がした。
「あれ、ラジェシュ君じゃないか」
　空港ビルの外、指差す先に見覚えのある顔が手を振っていた。
「すみません。航空チケットがないと、ビルには入れない決まりなんです」
　安堵の笑顔がこぼれ、三人はラジェシュ氏と握手を交わした。
「今日はもう休みますか」
　ラジェシュ氏の言葉に、伊藤延雄会長が言った。
「何処かに例会をやっているクラブがあるはずだ。そこに連れてってくれ」
　旅の疲れに足も伸ばさぬうちの言葉に、ラジェシュ氏は驚いた。
　すぐに電話をかけ始めた。幾度かのやり取りの後、ラジェシュ氏は顔を上げて言った。
「パタン西ロータリークラブが面会してくれます」全く面識も約束もない状態で、会ってくれるかどうかすらわからなかった。それでも思い切って飛び込んだ、パタン西ロータリークラブ。

　そこでは、町の身寄りのない子供たちの援助について話し合いの最中だった。
　そう、遠いこの地でも、「ロータリアン」は活動していたのだ。
　当時の会長、ハリオム・シュレッサ氏はラジェシュ氏の通訳した話に驚きを隠せなかった。
「あなたたちの素晴らしい計画に、ぜひ参加したい。パタン西 RC は協力を惜しまない」

ハリオム氏は、熱の篭る声で言った。

5. 建設予定地

目的地はヌワコット郡ビドゥール市。

カトマンドゥから車で 3 時間 30 分。深い谷を覗き込むようにして走る車の中。

「町の有力者が会ってくれるそうです」

案内された町の大学の一室に入ると、日に焼けた顔が一斉に三人を見た。来訪した意図を告げると、有力者たちはその手を取って言った。

「私たちの町に、学校を作ってください」

事前にラジェシュ氏が話を進めていた。日本で会員が不安を感じ、計画が停まっていた間も、彼は独自に情報を集め、努力を重ねていたのだった。

「わかりました。しかし、いろいろ準備が必要です」

すると、意外な返事が返ってきた。

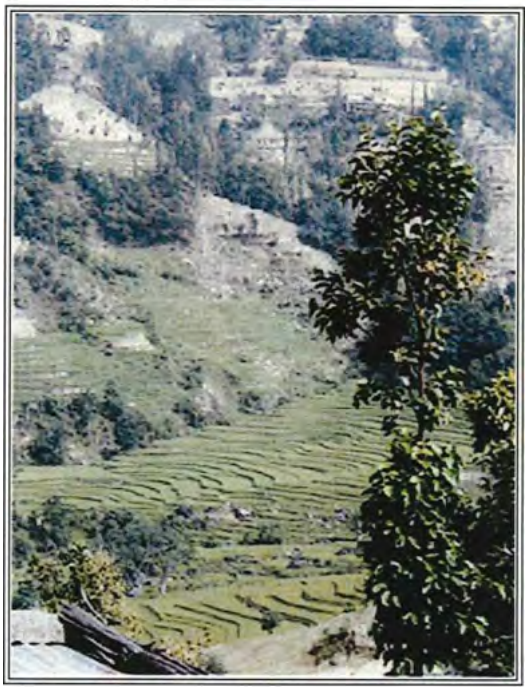
「建設予定地と、そこまでの道、電気などの整備はこちらで負担します」

信じがたい言葉。握られた手が熱かった。

「早速、建設予定地を見に行きましょう」

成田会員、急展開に目が眩む思いがした。

「ここが提供できる土地です。ご覧の通り、何もありません」



背の低い草が生えた平坦な土地が、突如断ち切られたように牧草の茂る丘に繋がる。その向こうは、鬱蒼とした森が広がっている。

「こんな場所に建てられるのか」

口にこそ出さないが不安を感じていると、有力者のひとりが言った。

「ここなら、山から水が引ける。町にも近いので電気も引ける。その費用は町で負担しよう。どうだい、見晴らしもいいだろう。なあに、土地は平らに均せばいいんだ」

この牧場の持ち主であり、土地を提供してくれた、カースト制度の塗装職人チトラッカー氏だった。

三人は牛が放牧されている建設地の写真を撮った。

6. 活動再開

「それはすごい。すぐにでも動き出さなくては」

三人の帰国報告を受け、会員たちは沸き立った。暗闇で手探りのようだった計画に、眩いほどの光が差したのだ。

外務省を訪れ、活動の説明をした。外務省では早速、現地カトマンドゥの日本大使館に連絡をしてくれた。

「日本大使館に冨永という一等書記官がおります。現地訪問の際はお立ち寄りください。なにかと情報も必要でしょうから」

冨永書記官は、その後二度にわたる現地訪問の折、様々な助言やネパールの国内情報について話をしてくれた。また、ネパールにおいて日本語でコミュニケーションできる場所があるというのも心強く感じられた。

夏が過ぎ、10 月。うれしいニュースが飛び込んでくる。

「学校建設の許可が下りました」

勢い活気立つ。山田会員の提案からちょうど 2 年。五里霧中であった計画に、ようやく形が見え始めた。

時期を同じくして、パタン西 RC のハリオム氏から連絡が入る。

「パタン西 RC から、専任協力者を 3 名選出しました。ようやく、正式にお手伝いが出来ます」

ハリオム氏は自ら、その一員となっていた。

7. 仮校舎での授業

2002 年 5 月。ビドゥールの児童が集められ、大学の一室を借りての仮授業が開始される。

その頃、ネパールのパタン西 RC では、学校運営の準備が進められていた。
建物だけ出来ても学校にはならない。平塚西 RC に運営まで要求するわけにもいかない。
日本からの思いに応えるためにも、しっかりした運営を計画しなくては。
ハリオム氏の指示にも熱が篭る。

その年の 9 月、仮の校舎を借り、学校の運営が始められた。
送られてきた写真には、揃いのシャツとネクタイの子供たち。皆、真剣な表情で教科書を見ている。

「一刻も早く、校舎を完成させたい」
連絡係を自ら申し出た成田会員、決意を固くした。

8. 再訪問

2002 年の暮れから 2003 年の春までの間、ネパールでは建設予定地の整地が行われていた。
牧草地を均し、子供たちが走り回れるだけの広さを作らなくてはならない。
「まだ始まらないのか」

成田会員は遅々として進まぬ状況に苛立った。
そんなある日、一通のＥメールが成田会員の元に届いた。
「お待たせしました。5 月、学校建設の定礎式典を行います。是非いらしてください」

5 月 28 日。その年の吉川会長と成田の二人は、2 年ぶりに機上の人となった。
しかしトランジットのデリーのホテルで、成田会員は眠れない夜を過ごしていた。
ハリオム氏に宛てたメールの返事が来ない。漠然とした不安が持ち上がっては消えていく。
幾度かのうたた寝を繰り返した後、窓の外が明るくなると、成田会員はホテルの外に出た。
軽いジョギングをすると、ようやく気持ちが切り替わる。
前夜の到着時には 41℃もあった気温も、朝は 25℃ぐらいで、平塚とあまり変わらない。
「行って見なくちゃわからないじゃないか」
そうして、改めてカトマンドゥに向かう飛行機に乗り込んだ。

トリブヴァン国際空港は、2 年前と同じような湿った風が吹いていた。
今回も先行していたラジェシュ氏が迎えに来て、早速ホテルに案内された。
ホテルに入り、シャワーを浴びて一息ついた頃、ラジェシュ氏が呼びに来た。
「チトラッカー氏の一族が会いたいとのことです」
事前にラジェシュ氏が町の有力者に当たりをつけていたのだ。
早速出向いていくと、そこにいた 12 名ほどの人が言った。
「私たちの町の学校建設と、運営をお願いします」
「協力は惜しみません。しかし、援助ですべて賄うわけにはいきません。あなたたちにも協力をお願いします」
おんぶに抱っこの運営では困る。「援助慣れ」から脱却し、独立独歩こそが発展に繋がるのだ。
男たちは言葉少なに帰って行った。

その日の午後、パタン西 RC の例会が行われていた。
2 年前、飛び込んだことを思い出しつつ会場へ。

その日は、病気になった身寄りのない少女の治療費支払いについてと、学校に行けない若者への奨学金制度について、熱の篭った議論が交わされていた。

吉川会長と成田会員、少しでも力になればと寄贈した。

その後、パタン西 RC の会員に二人が紹介され、吉川会長が両クラブの友好関係構築を託したメッセージを読み上げ、成田会員が国際ロータリー活動の識字率向上と、結成 30 周年を記念した周年事業をかねた一大プロジェクトであると説明すると、35 名ほどの全会員が立ち上がり、惜しみない拍手を二人にした。

成田会員、昨晩に眠れないほど心配したパタン西 RC との感懐も、「全面的協力」の約束を取り付け、気が楽になった。

9. 定礎式

翌、5 月 30 日。奇しくも同じ日に、二人はビドゥールに向かった。

朝 8 時に出発し、到着は昼前。一昨年に訪れた大学のキャンパスの一角。そこに日の丸とネパールの国旗が描かれた仮校舎があった。

間借りながら、75 名の児童が学ぶ、ヒマラヤン英語学校。

児童たちが立ち並ぶ中、到着早々、吉川会長に花束が渡された。

それに返すように、二人は持参したクレヨンと画用紙を、子供たち一人一人に手渡していく。

「ダンネバードゥ。デーレイ　ダンネバードゥ　ツァ」（ありがとう。どうもありがとう）

子供たちの 75 の笑顔が溢れる頃、ヌワコット郡を代表する知事のダガール氏が現れた。

村人 30 名程が見守る中、覚書の調印式が厳かに行われた。

「それでは、定礎式を行いましょう」

200m 程離れた建設予定地まで、全員が歩く。整地の終わっていない砂色の土地に、1m 程の穴が掘られていた。

「中に入ってください」促されて吉川会長が降りると、鮮やかな花が載せられた銀の盆が手渡された。

神に祈り、花を捧げ、米を撒いた。

「これで調印と定礎式が無事に終わりました。続いて記念式典を行います」

見上げるような大きな木の下に、村人たち 150 人程が集まっている。

ダガール氏は立ち上がると、厳粛な表情でスピーチを始めた。

「日本とネパールの素晴らしい友好関係が、今回の学校建設に繋がりました。両国の学校教育への取り組みが、世界平和に大きく貢献しています。今回、子供たちに教育の場を提供してくれた平塚西 RC とパタン西 RC に深い感謝を捧げます」

村人たちの拍手が鳴り響く中、吉川会長が言葉を継いだ。

「我々、平塚西 RC は、今回の学校建設に最善を尽くしたいと考えております。常日頃から世界平和を願っておりますが、この学校からその礎が育っていくことを期待しております」

改めて高らかに拍手が鳴り響く中、二人は固い握手を交わした。

続いて学校運営委員会より感謝状が読み上げられ、吉川会長に手渡された。

感謝状

ネパールと日本との永遠の変わらない友好関係は、本来あるべきネパールのあらゆる発展を促進し、世界平和に貢献してきました。

チトラッカー・ソサエティは一般社会の恵まれない人々の間に教育を普及させることにより、社会生活の進歩向上を企てる役割を果たしています。

学校運営委員会は、国際ロータリー第 2780 地区、平塚西ロータリークラブの協力のもとに、この地域の若者達を育成するためにヌワコット地区にヒマラヤ・アカデミー英語学校を開設しました。

学校運営委員会は、只今学校建設にとりかかっているところです。

定礎式は、2003 年 5 月 30 日に行われることが予定されていましたが、吉川氏と成田氏のお二人がはるばる日本から来られ、式典に参加され、建設予定地に礎石を神前に供えられました。

我々、運営委員会メンバーは、この祝賀行事に際して、二人の名誉あるゲストに対して、心からの御礼と感謝の気持ちを表明するものであります。

また我々は、日本の良き職場と地域社会を代表する平塚西ロータリークラブの皆様に対して、感謝の気持ちを伝えたいと思います。

どうも、ありがとうございました。

2003 年 5 月 30 日

ヌワコット、ヒマラヤ・アカデミー小学校
学校運営委員会議長
チトラッカーソサイエティ　召集権者
バグハット　バハダール　チトラッカー

夕刻、ホテル前のレストランで、成田会員は吉川会長と夕食を共にしていた。

調印と式典参加、二つの目的を達成した喜びに心地良い疲れを感じながらも、“学校建設と運営”という更なる仕事の大きさに、身が引き締まる思いであった。

10. 建設確認

成田会員にとって、帰国直後であっても達成感に浸っている余裕はなかった。

定礎式が終われば、学校建設はすぐにでも開始される。つまりは資材や人件費など、直接的な「資金」を要求されるのだ。

また、更なる不安もない訳ではない。遠く離れたネパールでの建設やその状況確認など、管理の難しさもあった。

そこで、吉川会長は任期末のある日、外務省アジア大洋州局南西アジア課宛に一通の文面をしたためていた。

今回のプロジェクトのような経験がない故に、外務省とネパール大使館に指導を要請したのだ。

月が明けて 7 月。伊東得司氏が会長に就いた。同時に成田会員は識字率向上支援実行委員会の会長となり、実質的にこのプロジェクトの先導役となる。

二人は連名で第 2780 地区（横浜・川崎を除く神奈川県）の中西ガバナー宛に支援依頼を提出する。

間を空けず山田会員、吉川会員（前会長）、伊藤延雄会員が中西ガバナーを訪問し、活動についての説明を行う。

さらに 8 月始め。事前に地元選出議員の秘書氏に、外務省へコンタクトを依頼してあったこともあり、成田会員、伊藤延雄会員、および秘書氏が同行の上、外務省を訪問する。アジア大洋州局南西アジア課の地域調整官・中野氏、外務事務官・磯野氏に面会し、訪問の趣旨説明を行う。外務省および大使館は運営委員への参加はできないが、その活動にはネパール・カトマンドゥ日本大使館として大きな評価をされ、大使が直接関係者と面接するなど、積極的な協力を受けられるとの回答を得られた。

8 月末、成田会員は建設資金送金の手配で奔走していた。現地からは資金の送金を求められていたが、予算や使途が不明瞭だった。
「現地を確認するしかない」
建設状況をこの目で確認したい。ネパールの日本大使館にも計画概要を説明し、正式に協力を求めたい。何より協力関係にあるはずのパタン西 RC の活動が見えてこない。
「いっそ、みんなで行ってみてはどうか」
熱意を伝えるのに一番有効な手段は、大勢で行くことだ。視察訪問は 10 月 29 日。成田会員をはじめ、山田会員、伊藤延雄会員、高屋鋪会員、田沼会員の識字率向上支援実行委員が参加。随行員として英語教師・東北大学教授の野中克彦氏にお願いしたところ、心快く引き受けて戴けた。また通訳としてラジェシュ氏に協力を要請することとした。

11. 現地視察

10 月 29 日、カトマンドゥに到着した一行は、ホテルにチェックインすると休む間もなく、ネパール日本大使館を訪問した。出迎えたのは冨田一等書記官。

現地随行員のラジェシュ氏、それと学校法人からリーダーのチトラカ氏と会計担当者が合流して、プロジェクトの説明と情報交換を行う。その夜、パタン西 RC 直前会長宅でガーデンパーティーに招待され、有意義な時間を過ごす。
明けた 30 日、朝 8 時にカトマンドゥを発つと、2 台の車に分乗して片道 3 時間の道程を走る。
成田会員には慣れた道ではあったが、途中で軍隊の検問を 3～4 回に渡り受けた。ここ最近のネパール国内情勢の不安を垣間見て、みな緊張した面持ちであった。
しかし、11 時過ぎにヌワコット郡ビドゥール市に到着すると、そんな不安も消し飛ぶほどの歓迎を受けた。特に感動したのが、二列に並んだ子供たちが、それぞれに花を持ち、手渡してくれたことであった。
「今回、一番喜んでいるのは子供たちです」
誰の言葉を通訳してくれたのかはわからないが、一人一人の笑顔が胸に沁みた。

セレモニーの後、工事現場を視察する。基礎の土台と鉄筋の柱が立ち上がっており、レンガ積みの準備も進めているようだ。

もともと傾斜のきつい土地であったがために、何かと問題点は多いという話であった。しかし、学校関係者も自ら参加して計画を進めようという気持ちがあるらしく、それぞれが対策を講じ、乗り越えてきたという話だった。

視察終了後に行われた歓迎昼食会で、この地区の学校教育に寄せる期待の大きさを強く感じた。

ビドゥール市の市長、教育長をはじめとする教育関係者、地元警察署長などが参加し、それぞれが挨拶のたびに感謝の意を表し、さまざまな計画を口にした。

「校舎の周りに樹木を植えましょう。立派な学校には立派な樹が似合います」

誰かの計画に拍手が鳴った。

その夜、パタン西 RC の例会に参加した一行は、会場の雰囲気に目を見張った。前回までは、何処となく距離を感じていた会員たちが、この計画に一歩も二歩も前進していることが確信できた。

距離は遠く離れていても、マッチング・グラントの手続きを進め、ひとつのプロジェクトに対し協力し合うことで、ロータリアンとして友情が深まることを実感した。

マッチング・グラントの書類作成も、2780 地区より 2,000 ドル、平塚西 RC より 1,000 ドル、パタン西 RC より 200 ドルで合意することができた。

「ラジュシ君、大役だよ」

パタン西 RC パスト会長のハリオム氏が申請書類を作成し、それをラジェシュ氏が 11 月 7 日に来日して平塚西 RC に届けることになったのだ。
「その書類を日本で完成させて、RI 事務局に提出するんだからね」
「大丈夫。任せてください」
ラジェシュ氏が緊張に喉を鳴らした。

12. 開校まで

11 月 7 日にラジェシュ氏が来日し、申請書類は無事に RI 事務局へと郵送された。
現地の学校建設も、ネパールらしいスローなペースであったが、確実に進んでいたが、ここに来て資金面での不安をハリオム氏が口にしはじめた。
建設資材の値上げにより、予算が足りなくなったのだ。年末の 12 月 31 日、大晦日にもメールで送金の依頼が成田会員に届いた。
そして 2004 年 3 月。ネパールのハリオム氏より再びメールが届く。とうとう屋根部分のコンクリート打ちまで終わったという。次は間仕切りや外壁工事。しかし昨年末より値上がりを続ける建設資材の為に、33％もの資金不足が予想されるという。
「大変言いにくいことですが、資金の更なる増額を・・・・・・」
要求が繰り返しされたが、「一方的に与えるのではなく、共に創る」という平塚西 RC のスタンスは貫かれた。
そう、助けが必要なのはネパールだけではない。そしてネパールのロータリアンもまた、子供たちの未来に手を差し伸べる努力をしなければならないのだから。
不安な冬は過ぎ、春の訪れと共に建設は順調に進行した。まるで牛の歩みのようであったそれまでと打って変わり、進捗状況は目を追って進んでいく。

4 月 16 日、成田会員がいつものようにメールでハリオム氏に建設の状況を確認していると、6 月頃には完工の予定と書いてあった。
以前、柱だけがほぼ立ち上がった学校の写真がメールで届いたことがあり、この時は飛び上がるほど嬉しかったのを思い出した。
「これで完工の写真でも送ってくれれば、現地にそう何回も行くこともないかもしれない」
期待を胸にしているうち、建設現場とほぼ出来上がった教室の写真が数枚、ラジェシュ氏を通して成田会員の元に届いた。
「想像以上だ」
思わず口をついて出た。急いで受話器を手にすると、平塚西 RC の仲間に電話をかけた。
「そう、開校式だよ。秋には皆で一緒に訪問しよう！」
一人でも多くのロータリアンが参加できるように。成田会員はすでに計画を立て始めていた。

写真の完成した新校舎は、驚くほど立派に出来ていた。真っ白な壁と木製サッシの窓枠が、まるで瀟洒な邸宅の様であり、街中の一般的な住宅とは全く違う出来栄えだった。

これまでに送られてきていた工事中の写真からは想像もつかないほど美しく仕上がっていた。

そして 10 月末の秋晴れの日、7 名の会員が機上の人となった。11 月 1 日に行われる、開校式典に出席するために。最初にこの計画が提案されてから、ちょうど 5 年の月日が過ぎていた。

7 名の会員を迎えたのは、立派に出来上がった校舎と 80 名の子供たち。その先生たち 5 名、そして総勢 300 名もの町の人々。みな、輝くような笑顔だった。

澄み渡る青空に色とりどりの旗がはためき、ここがあの放牧地とは信じられないほどに整えられた校舎で、式典は華やかに行われた。

会員たちがまさに感無量といった顔で子供たちに囲まれるなか、伊東得司会長の開校式祝辞を、成田会員が英語で読み上げた。

Congratulations, the opening of Himalayan Academy English School!

ヒマラヤ・アカデミー小学校の開校式、おめでとうございます。

本日ここに出席できました我々平塚西ロータリークラブ会員一同、心から喜んでいます。

思いおこせば 5 年前の 1999 年より、ネパールに学校をと、まだ夢の段階からスタートしたプロジェクトでしたが、本日このように校舎が完成し学校が開校されたのを目の前に見て、全く感無量です。

2001 年 5 月 31 日、我々のクラブ会員の伊藤、吉川、成田の三名が初めてこの地ヌワコット郡ビドゥールを訪れました。それから二年後の 2003 年 5 月 30 日、吉川、成田の二人が再びこの地を訪れ全校を挙げての歓迎を受け、「調印式」「定礎式」「記念式典」が執り行なわれ、念願の校舎建設の第一歩が踏み出されたときの感激は、今でも忘れられません。

あれから 17 か月。順調に建設工事が進み校舎が完成し、今ここに完成式を迎えることになりました。ここまで来ましたのも学校関係者はもとより、ここビドゥールの人々の熱意が校舎建設を実現させたものであると思います。

また、カトマンドゥ市内にあるパタン西ロータリークラブが、この学校建設について我々と共に協力してくれたことも大きな力になりました。ロータリアン相互の協力により、この事業は進められていくことを確信します。

小学校の子供たちの授業を参観した時のこと、黒板に大きく「ネパールと日本の友好」(A FRIENDSHIP BETWEEN JAPAN AND NEPAL)と書かれていました。ネパールと日本との友情は永遠に変わらないと思います。

我々の訪問はこれが四回目ですが、今後も我々クラブの会員たちがこの地を訪れ、現地の人たちと相互理解、親善、友好を深めることを願っています。

初期の校舎建設という目標は達成されましたが、教育の理想とする学校はまだこれからです。我々は協力援助を惜しまないつもりですが、この学校が困難を乗り越え、拡大発展していき、近い将来日本とネパールの人々の間に、平和と友好と向上をもたらすことを祈念しまして祝辞とさせていただきます。

2004 年 11 月 1 日

国際ロータリー第 2780 地区　平塚西ロータリークラブ

2003-2004 年度会長　伊東得司

13. 寄せる想い

ネパールに小学校を作るキッカケ

平塚西 RC 会員　　山田　雅孝

米山奨学生の OB で組織されている、国際ロータリー2780 地区の学友会会長であった、プラダナング・ラジェシュさんとの出会いが、彼の母国であるネパールに小学校を設立するきっかけになった。

彼が、母国の子供たちへの大きな夢を叶えたいと熱く語っていたことを今でも思い出す。

その話の中で大変ショックな、思いがけない一節は生涯忘れることが出来ないと思う。彼は「日本人の若者は大変に貧しい。それに比べると母国の子供たちは、純粋で心はずっと豊かである」と言ったのだ。

そこにいた我がクラブのメンバーは一瞬で顔色が変わってしまった。私たちは大きな勘違いをしていた。経済的な物差しだけでモノを見ていたのだ。

第三回目にしてやっと参加できた私は、仮校舎で元気に遊ぶ子供たちとその父兄の熱烈な歓迎を目の当たりにして、ラジェシュさんの言葉の意味が実感として伝わってきた。

紆余曲折はあったものの、このプロジェクトに携われたことに感謝したい。

日本の気まぐれなオジサンたちの夢を叶えさせてくれた、このかわいい子供たちに！

第一回ネパール訪問（2001 年 5 月末）

平塚西 RC 会員　　伊藤　延雄

平塚西 RC 創立 25 周年記念事業の一環として、ネパールに学校を建てよう。

会員一同賛成。しかし「言うは易く行なうは難し」の格言どおり。いろいろな難問題が予想される。まずは学校建設予定場所ネパール王国ヌワコット郡ビドゥール市を訪問する。

現地の関係者チトラカ氏他 9 名と話し合う。概略の説明を聞くに止め、日本に帰り検討することで了承を得る。

このプロジェクトを成功させる為にどうしても必要なのは、ネパールのロータリークラブの協力である。事前打ち合わせなしで勇気を奮い立たせて、パタン西 RC をネパール訪問の趣旨を説明する。（ラジェシュ君通訳）

日本で得た情報とは違って立派な例会とロータリアンたちの人柄に敬服する。

彼等のプライドを傷つけないよう言葉を選んでスピーチを済ませバナーを交換する。快く協力を約束してくれたので一先ず安心する。自国の将来を憂いて自分たちの手で質の高い教育を構築しようと懸命に努力をしている有志の情熱がネパールのロータリアンの心を動かした、三者が一体となってこのプロジェクトが動き始める。

尚、このプロジェクトの推進については、元米山奨学生の「プラタナング・ラジェシュ君」の献身的な協力があったことを申し添えておきます。

夢は実現した！

平塚西 RC 会員　　吉川　寛巳

この識字率向上支援のためにネパールに学校を建設しようというプロジェクトは、最初は夢のようなものであった。またそれを実現するためには、多くの困難があると考えられていた。そうした中で、何よりも欲しかったのは現地の情報だった。

いつまでも机上の空輪を重ねていても埒が明かない、ひとつネパールの現地へ行ってみようと候補地の一つヌワコット郡ビドゥールを、伊藤(延雄)、吉川、成田の三名が訪れたのは、2001 年 5 月 31 日のことであった。

帰国後このプロジェクトを推進すべきか否かをめぐってクラブ会員全員の意見を求めたが、情報不足からか総論賛成、慎重に各論検討の状態でなかったかと記憶する。とにもかくにも、前向きに資金援助はしていこうということに決定した。

ネパールとの情報も途絶えていた一年後の 2002 年 5 月、突然学校建設の許可が下りたという知らせがラジェシュ氏によりもたらされた。それから事態は学校建設に向け急展開したのであるが、何よりも我々が勇気づけられたのは、ここまで来た現地の人々の学校建設にかける熱意であった。

2003 年 5 月 30 日「覚書調印式」「定礎式」が行われ、それから 17 か月後の 2004 年 11 月 1 日第 1 期校舎が完成し、晴天の下、開校式が行われ新学校のスタートを祝うことが出来たのである。

振り返ってみれば、このプロジェクトを成功させたのは、幸運もあるが、まず現地の人々の熱意であり、次にこれを支援するロータリアンの情熱と勇気と協力であったと思う。これを機会に、今後ますますネパールと日本の交流が進み友好が深まることを願っている。

平塚西 RC 会員　　田沼　丈二

初めてネパールを訪問して空港を降りカトマンドゥに向かう。車窓から見た風景は、中国の田舎に似た風景でさほど珍しさを感じさせなかった。しかし、宗教の違いがあり、牛が道路の真ん中を悠々と歩くところを見ると国の違いを感じさせた。

日常生活では、バス、トラック等、インド製の TATA というメーカーの車が多く、工業的なものはインドの影響を強く感じ、売店のトイレなど中国一般家庭の形式と同じで、生活面では中国の影響が強いのかなと感じました。

ビドゥール市の学校建設予定地は、カトマンドゥから車で 3 時間半の道のりで居眠りでもしてたら、舌を噛むような道路で、車酔いする人はとても無理、車のすれ違いなど、オーバーにいえば命がけというドライブでした。しかし自然の山々は美しく、民家近くの山々の傾斜には陸稲、ミニ大根の畑があり、食料には困っていないと感じとれました。

私の 1 回目の訪問では、仮校舎で女性の可愛い先生 3 名と約 70 名の子供たちが楽しそうに勉強していると思えたのですが、私たちの訪問で歓迎のため、勉強に身が入らなかったのかと感じられる一面も垣間見ました。地元パタンウエスト RC の協力を得れば、このプロジェクトは成功すると確信を得ることが出来ました。

私の 2 回目の訪問は開校式です。思ったより立派な校舎で、この予算で良く出来たと、また国の違いを感じました。約 80 名の子供たち、父兄、地元有志及び協力者で 120～130 名はいたでしょうか、炎天下の中、約 2 時間のセレモニーが続き、私たちは疲れましたが、参加した仲間には満足感が溢れていたように思います。

このプロジェクトに参加して、私の感覚では 2～3 人協力し合えば出来そうに思いますが、成田委員長をはじめ諸先輩たちが力量を発揮し、クラブ全員参加協力でプロジェクトの成功へ導くことに、またロータリーの良さを学んだ次第です。

今後の課題

平塚西 RC 会員　　高屋鋪　尚史

伊東得司年度に、私は国際奉仕委員長を分担していた。識字率向上委員会には何度も出席し学校建設に関し熱い討論を繰り返してきたが、伊藤延雄前々会長の「実際に現地に行きこの目で確かめなくては何も始まらない」との熱意に打たれ、国際奉仕委員長としての立場もあり、ネパール学校建設現場視察の旅行に加わった。

仕事がら東南アジアは何度も旅行しているがネパールは初めてであった。飛行機を降り空港の建物に入るとシンガポールとは違う匂いと雰囲気であった。

10 月 30 日カトマンドゥ出発。ビドゥールに向かう。街を出ると風景は一変する。40 年前マレーシア・ジョホーバルから、ある造船所に向かった時と良く似た風景で、民家は疎らで道には街灯も信号もなく、行き交うバスには屋根の上まで乗客が溢れ、登下校する子供たちは素足の子も中にいた。ただ救いは舗装されていたこと。聞けば海外資金援助で建設した発電所工事の為に道を整備し、舗装したとのこと。その道も、後の補修をしていないので大きな穴がいくつもあき車の揺れも大きい。

建設中の学校に通う生徒は道すがらに見た子供たちに比べ、制服を着て靴を履いている。恵まれた家庭の子弟という感じがした。

この学校の今後の運営をどのようにしていくのか。建物だけが残った廃校にはしたくない。識字率向上の為、底辺を如何に支えどのような支援をするかが今後の課題だと思う。

開校式に出席して

平塚西 RC 会員　　渋江　邦彦

便の都合で 10 月 30 日にタイのバンコクに一泊し、翌 31 日待望のカトマンドゥに到着。夕方からパターウエスト RC の元会長宅にディナーパーティに招待され、ネパール料理とアルコール度の強い地酒で歓迎を受け、私たちもたどたどしい英語を頼りに大いに盛り上がりました。

11 月 1 日早朝より、いよいよ一行 10 人は学校を目指して出発。直線距離にするとそれ程でもないと思うのですが、山道を迂回しながら車がやっとすれ違える所を、あまりスピードを落とさずに走りますので、手は前の座席にしっかりとつかまり、足は車とすれ違う度に思わず力が入ってしまいましたが、ふと相手のバスを見ますと屋根の上に何人もの人が乗っており、これにはびっくりさせられました。

途中何度か休憩をとりながら、午前中には生徒や先生、父兄たちが花束を持って出迎えてくれる中、無事学校に到着。

炎天下での長い式典、記念植樹の後、説明を受けながら校舎を見て廻ったのですが、机やガラス等の備品を除いてはほぼ完成。こちらの予想していた以上のすばらしい校舎に仕上がっており、まずは一安心致しました。

帰路に幹線道路からやや入った所で、日本語の看板と崩れかかった校舎らしき建物を目にしたのですが、我々の学校は、ああはしたくないと決意を新たに致しました。

夕方には、エベレストの山々が一望できるといわれております景勝地のナガルコットに到着。全員でホテルの横の山頂からすばらしい景観を満喫し、おいしい料理とお酒を酌み交わしながら、いつの日か今日の式典で、瞳を輝かせながら我々をじっと見つめていた、あの幼い子供たちの中から米山奨学生として来日出来るような子が一人でも出て欲しい。

そんな夢の語りながら夜の更けるのも忘れて話に花を咲かせました。

2780 地区　平塚西 RC
識字率向上実行委員長　　成田　清

山田会員が最初に“ネパールに学校を建てたらどうだろう”と第一声を上げた時、始めは“夢のような話”と思っていましたが、伊藤延雄会員が“一度現地に行って目で確かめてこよう”と言ったことにより第一歩が大きく前進しました。

今回の企画を通じて強烈に感銘を受けたのは、ロータリークラブには世界中に奉仕をしようと考える仲間が多数いるということ。パタン西 RC のハリオム氏は何十回の E メールにも着実に答えてくれたこと、そして建設途中の写真までメールで送ってきた時には全く飛び上がるほど嬉しかった。

そして昨年の秋、開校式に赴き、完成した学校を見た時、何と白く塗られたこの学校は輝いて見え、嬉しそうに集まっていた児童たちのどの顔も美しく見えました。この時の感動こそ、それまでのいろいろ多くの困難など吹き飛んでしまい、奉仕活動の喜びとはこういうものかとつくづく実感しました。

これからこの学校を通じて草の根の日本文化の紹介や世界平和を願う我々ロータリアンの心意気を若い多くのネパールの人々に少しでも理解してもらうよう通い続けようと考えております。

これだけ多くの感動を与えてくれたロータリークラブに心より感謝申し上げます。